

Title	Temperament and character as predictors of fatigue-induced symptoms among school children in Japan: A 1-year follow-up study(Abstract_要旨)
Author(s)	Yamano, Emi
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2010-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/120536
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士 (社会健康医学)	氏名	山野 恵美
論文題目	Temperament and character as predictors of fatigue-induced symptoms among school children in Japan: A 1-year follow-up study. (日本の児童生徒における疲労関連症状出現の予測因子としての気質・性格の検討—1年間の追跡調査)		
(論文内容の要旨)			
<p>【背景】近年、社会及び周辺環境の変化に伴い、小中学生において疲労関連症状がみられるようになった。また、長期欠席や不登校の児童生徒が増加傾向にあるといわれており、疲労関連症状の慢性化がその一因である事が推測される。先行研究によると、小中学生時は身体の発達、教育システムや対人関係の変化を背景にした心理面の葛藤が症状出現に影響すると報告されている。そこで、小中学生を対象に、個人の内的要因と疲労関連症状出現の関連性を検討した。</p> <p>【方法】2006年12月(T1)および2007年12月(T2)の両時期に、4小学校、4中学校の小学4年生から中学2年生の児童生徒1512名を対象とし、菅原らの気質・性格尺度及び小児慢性疲労症候群問診票をもとにした自記式質問紙調査を実施した。気質・性格尺度は4つの気質(新奇性追求、損害回避、報酬依存、固執)と3つの性格(自己志向、協調、自己超越)の7下位尺度で構成されている。各下位尺度の特性は、新奇性追求:好奇心旺盛、損害回避:心配性、報酬依存:他者評価に敏感、固執:完全主義、自己志向:自律性、協調:協力的、自己超越:直感的と想定されている。小児慢性疲労に関する項目は、対象者が健常児であることを考慮し、疾患特異的な項目を除く身体的、精神的症状の項目を選択した。その内訳は、身体面では起床時疲労感、頭痛、筋力低下、精神面では意欲低下、思考力低下、気分の落ち込み等である。T1時の下位尺度得点を説明変数、1年後の疲労関連症状の出現の有無を従属変数として多変量ロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>【結果】全対象者の11.9%が、あらたに1つ以上の疲労関連症状を来していた。「損害回避」特性は、小中学生男子において意欲低下と正の関連(小学生:オッズ比(OR)=1.37、95%信頼区間(95%CI):1.06-1.79、中学2年:OR=1.20、95%CI=1.02-1.42)が認められ、また中学1-2年女子において気分の落ち込みと正の関連(中学1年:OR=1.15、95%CI=1.03-1.28、中学2年:OR=1.21、95%CI=1.06-1.38)が観察された。「自己志向」特性は、小中学生男子において筋力低下と負の関連(小学生:OR=0.80、95%CI:0.64-0.99、中学1年:OR=0.77、95%CI:0.62-0.95)が、中学1-2年男子において思考力低下と負の関連(中学1年:OR=0.67、95%CI:0.51-0.87、中学2年:OR=0.78、95%CI:0.62-0.99)が認められた。</p> <p>【考察】高い「損害回避」特性および低い「自己志向」特性をもつ児童生徒は身体的または精神的症状に脆弱性を示した。「損害回避」特性が高いと不安傾向が高く、「自己志向」特性が低いと自己受容性が低いために、そのような心理状態が身体的主訴として表面化、または精神的症状出現に繋がると考えられる。また、これらの特性は成人の場合と類似しており、疲労関連症状出現の予測因子としての有用性が示唆された。小中学生の期間に疲労関連症状と関連性が認められた気質・性格に留意することは、症状出現を未然に防止するうえで意義があり、今後、これを個々人に対応した効果的な介入手法の開発につなげることは、学校保健の見地からも重要であると考えられる。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

近年、社会および周辺環境の変化に伴い、小中学生において疲労関連症状がみられるようになった。症状の慢性化が増加傾向にある長期欠席や不登校の一因となっていることが推測される。そこで、小中学生1512名を対象に自己記入式質問紙による追跡調査を2006年12月及び2007年12月の2回にわたり実施し、個人の気質・性格と疲労関連症状出現の関連性を検討した。

全対象者の11.9%に1つ以上の症状が新規に出現した。気質・性格として「新奇性追求」特性が高いと筋力低下を、「損害回避」特性が高いと意欲低下を来しやすく、「自己志向」特性が低いと思考力低下を来しやすいことが示された。「損害回避」および「自己志向」と精神的症状の関連は、成人を対象にした場合と類似しており、これらが疲労関連症状出現の予測因子として有用であることが示唆された。

以上の知見は、疲労関連症状発現の未然の防止や早期発見、および個人に対応した効果的な介入に役立ち、学校保健学に寄与するところが大きい。

したがって、本論文は博士(社会健康医学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成21年12月7日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日: 年 月 日以降